

留学を終えて

先日、約半年の留学を終えてドイツから帰国しました。帰国に伴う諸手続きがようやく一段落ついたので、この機会に留学での学びや課題について記してみたいと思います。

わたしはドイツ南部にあるミュンヘンという都市に、今年の 3 月から 7 月末まで留学していました。ミュンヘンは豊かな緑と歴史的な街並みが共存する街で、多くの大学生が住む学生街でもあります。ベルリンではなくミュンヘンを留学先に選んだ理由の一つには、留学生が多く集まる環境があり、ドイツらしい伝統的な生活が色濃く残るこの土地で、異文化にたくさん触れたいと思ったことがあります。

この目標は期待以上に達成され、全体的に今回の留学に対してとても満足しています。しかし、終わりよければすべてよし、と片づけることのできない苦い経験もありました。今回のレポートではそのような経験をもとに、少しでも今後留学される方の参考になればと、いくつか体験談を書いてみます。

まず、留学が始まりすぐ気付いたことは、旅行者として英語が通じる街と、住民として英語が通じる街は異なるということでした。留学前のわたしは、ドイツ語はおろか英語の語学力も不十分だったので、初めての留学となる今回は英語を最優先にする計画でした。

しかし、英語圏の大学への留学は募集要件の語学力を満たすのも一苦労。そこで非英語圏の大学も視野に入れて英語が通じる国を探しはじめたとき、真っ先に候補に挙がったのが欧州の国々でした。中でもドイツは留学生が多く、英語で開講される授業の数も豊富です。ドイツの主要な都市について調べてみても、英語が通じやすい街だと評されているウェブサイトが散見されました。

その情報に安心し、英語を中心に学び、落ち着いてきたらドイツ語も学習しようとミュンヘンに引っ越してみてもどろきました。たしかに市街地ではほぼ英語が通じるのですが、自分の住んでいた学生寮近辺では英語で対応してもらえないお店や施設が多かったです。また、英語が話せるとはいえ現地の人々は基本的にドイツ語で会話します。ドイツ語を話せないと現地の友人を作ることも難しく思えました。

西山香帆（京都大学大学院修士課程 2 年）

それに気づいた後はドイツ語もすぐに日常会話を中心に覚えはじめ、最終的には簡単なやりとりはできるようになりました。そのことには満足していますが、やはり英語を学びたいのであれば最初は英語圏に留学の方がおすすめです。英語でのコミュニケーションが取れるうえで第二外国語を学ぶのであれば欧州は最適な場所だと思います。あまり多くはないかもしれませんが、同じように留学先に悩んでいる方の参考になれば幸いです。



ミュンヘン中心にある街のシンボル、荘厳で美しい新市庁舎

次に、留学先で自分がどれくらいマイノリティになりやすいかということについてです。つまり、アジア系の人を含め多様性がどれほどある国なのか、留学生は多いか、所属できそうなコミュニティはあるか、などです。

国単位でみても、移民や留学生などの「外から来た人」が生きやすい街、生きにくい街が存在するものだと思います。その要因の一つは、先ほど述べたような多様性の有無でしょう。自分の肌感覚に過ぎないかもしれませんが、やはりアジア人が少ない場所ではわたしのような人間は珍しいのか、好奇の目で見られたり、ときにはすれ違いざまに侮蔑的な言葉を投げかけられたりすることもしばしばでした。

現地の友人からも、ミュンヘンはベルリンと比べて家賃やセキュリティが高いため、移民が少ない街だと聞きました。だからこそ伝統的な暮らしや街の雰囲気がいずれ残っていると見えるかもしれません。しかしその友人は、「その結果として治安がよい一方で、住民がやや保守的になっているのかもしれない」とも言っていました。これは友人の一意見ですが、ドイツ国内外の旅行中に自分自身も同じようなことを感じました。

「伝統的な街」というと魅力的に聞こえますが、自分がマイノリティになりやすく、望ましくない対応を受ける可能性もある場所だということを考慮に入れた方が良いでしょう。旅行客として楽しむだけなら問題なくとも、住民として生活するとなると重要なことです。

悲しいことですが、こればかりは解決しにくいことでした。しかし同時に、この点は留学に来て一番良かったと思えたことです。わたしは今まで日本人として日本で育ってきて、人種や見た目で判断されたり差別されたりすることなどありませんでした。この件は、遠く離れた国でマイノリティとして初めて暮らしたことで、やっと見えたものだったのです。日本でも留学生や外国人労働者の方をよく見かけるようになりましたが、日本での英語の普及率や移民の割合を考えると、彼らはわたしの想像以上に大変なことに向き合っているのかもしれないと思うようになりました。

もちろんすべての街が先ほど述べたように排他的だとは思いません。ですが、今度の行き先はどれくらい自分がマイノリティになりやすい環境なのか、そのことに自分がどれほど耐性を持っているのかを知ったうえで留学先を選ぶことは大切だと思います。自分もそうでしたが、初めて留学するのだからそんなことは知りようもないという場合もあるでしょう。それでも、事前知識として調べておくだけでも十分有用だと感じます。

ここまでだとよくない印象ばかりになってしまっているかもしれません。ですがお伝えしたかったのは、逆境も自分の捉え方次第でよいところを見つけられると感じた点にあります。次からは、上述のような逆境に飛び込んだからこそ得られたことを紹介します。

まず、英語という言語がいかに便利な道具であるかを痛感しました。わたしが所属していたコミュニティは交換留学生が多い場所で、それぞれの母国語も文化も全く異なる環境でした。しかしそんな状況でも、英語が話せるという 1 点のみ満たしていれば誰とでも会話することができたのです。これには非常に感動しました。英語を勉強しようというモチベーションを真に実感できたのは、留学に来てからだったように思います。



初夏のヴェネチア旅行にて、宿で寮の友人らとカード大会中

またそれと同時に、現地の言葉を使おうとする姿勢の重要性も強く感じました。英語がとても便利だからこそ、用が足せる限り多くの人は英語を話そうとするでしょう。しかしそれは現地の文化を尊重していない、と捉えられるかもしれません。ミュンヘンで過ごして驚いたのは、拙くてもドイツ語で話しかけた方が明るく答えてくれる人がとても多かったことです。その国に慣れ親しむためには、その国の言葉話すのが一番だということでしょう。それが分かってからは、他の国に旅行に行くときも、できるだけ現地の言葉の挨拶は最低限は覚えるようにしていました。ちょっとしたことですがおすすめです。

最後に、お互いの文化を尊重するということです。留学生同士だと、異国での暮らしの苦楽を共にするだけでなく、お互いの文化を紹介しあうことで様々な国の特徴を知ることができます。そこで、自分の国とは全く違うものの見方に直面することがありました。そのようなときは、相手のやり方を一度しっかり受け入れたうえで自分の文化ではこうすることが多いと話して、お互いに理解を深めるようにしていました。書けば簡単そうですが、留学中に一番大変だったことかもしれません。

総じて、いろいろと反省もありますが、とても学びの多い充実した期間でした。今回の経験を糧に、今後も困難なことにも積極的に挑戦したいと思います。

末筆となり恐縮ですが、この留学を完遂できたのは奨学会の皆様をはじめ多くの方に支えていただいたからにほかなりません。この場を借りて、改めて深く御礼申し上げます。